

「このご縁をいつまでも」



仮設閉鎖に伴い最後のお茶会

東日本大震災

東日本大震災からまもなく7年目を迎える。東京電力福島第1原発事故のため、避難を強いられていた福島県楡葉町の住民たちが暮らす仮設住宅や借り上げ住宅（みなし仮設）が、3月末日で閉鎖されることになった。それを前にした2月2日、住民が暮らす会津美里町の宮里仮設住宅の集会所で、お茶会が開かれた。このお茶会は「避難する人とお友達になり、不安に耳を傾けよう」と会津若松市の本光寺坊主・沖井智子さんが呼びかけ結成した「んだんだ会」が2011年夏から続けてきたもの。最後となったお茶会では、住民と支援者たちが6年間の思い出を語り合い、別れを惜しんだ。

楡葉町からの避難者と交流

福島県楡葉町から約130キロ離れた会津美里町にある宮里仮設住宅。2011年6月に開設され、多い時には約50世帯が入居していた。ここでお茶会を開いてきたのは「んだんだ会」。会津美里町に隣接する会津若松市の本光寺坊主・沖井智子さんが、同寺を拠点とするガールスカウト福島県第3団とボーイスカウト会津若松第2団の団員やOB、近隣寺院の坊主らに「避難する人たちとお友達になろう。不安に耳を傾け、『んだんだ』（そうだ、そうだ）と会津言葉で相づちを打ちながら、思いを分かち合おう」と呼びかけて発足した支援ボランティア団体だ。

2011年夏から同仮設を訪ね、お茶を飲みながらの交流を始めた。最初の2年間は、お菓子作りや念珠作りをしながらのお茶会を毎月開き、「んだんだ」と寄り添いながら傾聴活動に力を注いだ。住民たちの生活が落ちつき始めるのを伺いながら、徐々に回数を減らし、2015年に楡葉町の避難が解除されてからは年1回の「初釜茶会」だけを開くようになった。その間にも、個人的な訪問を続け、住民たちに寄り添い続けてきた。

大震災の中で生まれた友情

今年2月現在、同仮設で暮らすのは40人となった。さまざまな問題を抱えて転居が難しい高齢者をはじめとし、幼児をかかえる若い世帯など、さまざまである。3月末の閉鎖で楡葉町に帰還することを選んだ石井紀長さん(77)。沖井さんを見て顔がほころんだ(写真)。「温かいご支援のおかげで、仮設での避難生活ではあったが、心豊かに過ごすことができました。その中心となって尽力してくださった沖井さんには感謝しても足りない。私は楡葉町に戻ることになったが、友人や知人たちは方々に離散してしまっている人は少ない。最後の交流には、すでに仮設を離れた人や地元での支援者なども駆けつけ47人が参加した。集会所の畳のスペースに赤い毛せんが敷かれ、本光寺から持参した茶道具が並べられ、「初釜茶会」の準備が整えられた。「初釜茶会」は、同仮設でボランティア活動のコーディネートをする楡葉町社会福祉協議会の根本正徳さん(65)から「長引く避難生活の中で、新年の雰囲気を感じたい」と入居者の声がある」と聞き、2012年から始めた。

最後の交流には、すでに仮設を離れた人や地元での支援者なども駆けつけ47人が参加した。集会所の畳のスペースに赤い毛せんが敷かれ、本光寺から持参した茶道具が並べられ、「初釜茶会」の準備が整えられた。「初釜茶会」は、同仮設でボランティア活動のコーディネートをする楡葉町社会福祉協議会の根本正徳さん(65)から「長引く避難生活の中で、新年の雰囲気を感じたい」と入居者の声がある」と聞き、2012年から始めた。

坊守が中心となり6年間にわたって支援



2013年3月14日に開かれたお茶会を写した1枚。みんなで桜餅を手作りし、お茶を飲みながらいろいろなことを語りあった

かきながら、感謝の言葉を交わしていた。仮設の閉鎖を前に別れを告げる「最後のお茶会」は、温かいように配慮してくださった。佐竹恵子さん(75)は「お礼の言葉が見つからない」と語った。沖井さんは「仮設住宅の閉鎖は仕方ないが、寂しい。でも、絆は一度結ばれたら切れないと思う。再会した時に名前が出てこなくても、『ああ、あの時』と心通う交流があることを願っている。大震災という大変な中で生まれた楡葉町の人たちとの交流、このご縁を大切にしたい。離れて暮らしても、いつまでも会津と楡葉は友人」と話した。

現在、楡葉町に住民票をおく人は7100人。しかし、実際に同町で暮らすのはその3割とだけ。多くの人が、生活インフラの整っていない隣のいわき市に越しており、楡葉町の復旧復興は困難な状況が続いている。(8面に関連記事)

現在、楡葉町に住民票をおく人は7100人。しかし、実際に同町で暮らすのはその3割とだけ。多くの人が、生活インフラの整っていない隣のいわき市に越しており、楡葉町の復旧復興は困難な状況が続いている。(8面に関連記事)